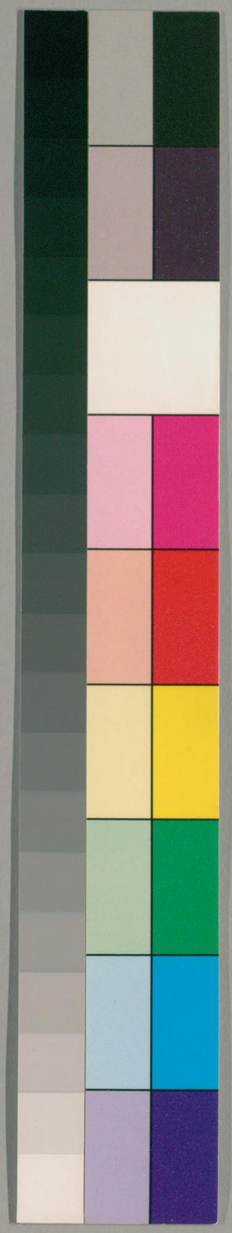
保

WA 7
224



国立国会図書館　タイトル『保元物語』 請求記号 WA7-224

ガラス使用

保元物語巻下

閑裏より是時もち義朝を免され義人志が弁助
長朝臣我りて於後世にこされ
れとう世世乃いまに於後里あなたとひ於さ
なくとも女子の外をみなたつ日てうしなふ
面しとなり省所ける為て秦聖次郎とめして
並ひけるをあまりに不便なれとも勅定なれ
もちうるし母のめのとういこひそ山林に
にけ所くれたらんをいかくせん六條堀川の者
所にある歯服乃四人をそもかしいるしてあひ
かまんてみうのほとやひしめずして舟風まで

5.11.15 国安図
93W62486

うしなへとそ申しける世京雅義の所使の所
とむすく思へ共宣命なれはちからなしなれ
を袖すりおさめ清くなくくあしをうくせて
かれ志ゆく志らぬそをもひきけるもくうゐを
却りふしそれまふてのめひこなりきんたちを
みなおはしけり兄とし弟とて十三次を兎弟
とて十一鶴弟を丸瓦王を七なり此人を延景を
見清きてうれし学ふこうありけれ秀野次郎
入道殿の御清らひすし奉りて此殿を十七日に
此殿山まで御座まへさ数なひて寺殿此清
りとへいらせぬひしを世間もいまゝ清くまし

とて北山宣林院と申し所なり志のひくつゝ
せぬひ此の天達の所事に相清らなく相御
めしにあひて清宮んさんにいまゝ来らんため
まぎし来て来らんとて此むらへまゝりにと申
せそおとまゝりいくあひて旅すしさ海の色て於
はしますさしきくたまともいまされのちいまゝ
清を加へを見なき祢をこれ〳〵もみなこひ数
こうおりひ侍達とて且れさ程まとあしまあら
うひのられけるこうあられなれ是相めいとの
清らひやもしてをしてをれ〳〵あしにむらひ
清く急やいうけ些すくみけらひつしのあゆを

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

きかたやとやされけるに小をとりつとの年
十三ならうめなあらろうのものをうひ
なさやまれらか亂(イエ)にむさかれ老そおきかれ
ともんをたましやうやしかかくみりをなる
事ばかりまふ物の世のあとをもまれ
まへ方の抱くすゑをとおりひ給ひて七十に成
のふらくの病氣(ビヤウキ)によて出家道(トンセイ)してこのみく
来望のふばたりきらほとの不當(タウ)人のまして
まれくをたまけ給ふるしあらしめをきらの
なさか事志のふ頭殿(ロウノトノ)りを是を清盛(キヨモリ)の和讒(ワザン)にて
うきらんおほ君のおとゝひ給ひしなひてく

こく一人りなしてのら事の御ゐてにほろ
なさんとそをのふらんをしとらをこくいさ
わの方もうなさきんこうかるしされ二三
年をとをしたまし給ひしおきなりしかともし(ウ下)
弟(ウカ)の舟窓(ヒヤウ)にそよくいひ志をれをとなんおらも
おりひめをせんすかそとよさてもト聖教(ウ)謝れ
のひてのちたらまちりし源氏(ゲンジ)の世だ為なんあ
こう口おしけきとそ三人のれとう世こちまを
おるけき給うちくをうこきおひぬたまりしたた
すけれはしまさしん兄(アニ)こちもみかきらきぬひ
ぬれさけをもかけ給ふ事頭殿(ロウノトノ)敵(テキ)をもを

はさみて一乗懸命経陀をよみからし経まで
のれちたすくるとき乞食流浪のみと成
てもしかしこまりひありしあれもすゞ為義
入道の子どもとしてありゆゝしきてはべきとさ
家乃たゆまことちだよくなりらくこひしき只
あしにしりひく菓世の後佛とせなをて西
むかひて極楽往生しらく御おとひとけちらをそう
やうりを道へてし三人のこんらとのくは
おもうて手をとりまらをわかれはてぬ
これをみく五十餘人の兵もみな袖をそうぬらし

けるこの公達のうちに一人はくめのとを
はるかさり内記平太そ天王殿の乳母吉田次
郎は亀若殿乃鶴若殿の後藤次をそまうしおき
かめとなりさしよりてうちゆひわきをあわせ
のこひをとたりけるのもとしころ日ころ失はうむ
遺骸なでておなでさきまてなくいきとうまとと
おりひけるあいさやもらうなしされされと
とゑとのをてた泥くなるまるかうされ生ねた
なさんくとかつやしとさふ衣袖のひとより
もあさ深なるさのいろ母かくはくむもしまるも
あうかれて思ひやられはるるかられなりおもへども

延景はむかつてまれまうされつくおもへとも
めまゐらかいさにむいりうちうちうまいらんもいさん
なかるまるいふへきか事をはまいりまいらんとされ
はなちたやと思ひわれし秦野次郎太刀をぬき
てうしろへまはりけれは乳母とも法因をぬれ
う娘のうへとかくてみかのきりかりまゐれしちこ
人のくひ林みそおちまけりかのこれかの見え
流くもあしもさらうそいまう仏てはうるわうれ
やまとまさうまらあうめさそわまもいり
まとを道へてしか外居うひともたせて寺りたてまつり
ら山くひとまうちつてさるまいらせのこひ勝

うきよにてめつらしきむさきのとのともやうほとゝよ
果報もなくむさまれんとくいさ死ぬるかいかん
ちよりもくはおやのさいしめしまけきはりし
られるは娘の也て世の中なれも色なれも御とわう
を命とおしみくや後のきうまけりうやん人はもん
すくんまるさ見え後はてそなしめやうの事候
いもんたりはきそしをまうさワのきうおく候みん
おはきてもとくまるうおさかたさなくみな
うんもあるくわしをていちぬすりとくは当
の今稿八幡へまゐてのふうまれも来うんと
中をしみなる来うむという色もおせをみなよう

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

ゆて十七日の曉頭(アカツキコウノトノ)の御りと色わらせぬひ
ゆしゆかうしをさゝ来らせてやうくゝ
さ数給ひゆゑ志りとも天氣にゆるさ数
りて此日の曉七条朱雀(シユシヤク)にてうしなひ来らせ
ゆぬ又人は渉(ワヤ)にしらをきのふのくれ
ほとに小山舟(ワヤシカ)屋と申あるてみかきまちはぬ
六条ゆゑ渡らせ給ひる四人のきんたちをも
舟(ワヤシカ)屋山にてたくいさうしなひ申しゆ是ゆゑ
渉(ワヤ)屋(ヤ)れ宮(サイゴ)後乃にうゝ見を海のうをられ作とて
伴(ワヤシ)のうをとらいさしゆゑ海をくれしを
かゝ里申しうを母うへこれをきくぬひ爰の

うほくかりさせんとて島(スナウチ)を入給ひしかやら
志はうをかりてまあしまくちいくきてけさは
幡へ来り給るを判官やすやものたゆうし民(ウエ)
神(カミ)にそれりしませをとたのそをかけてそ来り
ゑうしみかくうせぬらんうをなら奴方のか
なしさよりくれ画しとおりひかをなしりを
そのへ来るへ来きさしものまうまうすして
宮(サイゴ)後のまかんをを一目見さりし事乃くやし
さよ夜只これらかめんくにまれを来くんと
いひしをやうくうまかしてねいうをさる
さまかしおのかうり論(モツ)てたまをゆるめて下向

国立国会図書館　タイトル『保元物語』 請求記号 WA7-224
ガラス使用

ひまそわり者の相思ふやうり人をなけきの
わきかし世思ひんあらるもほとふりしかくる
うきへりしのみくさねん物のもほらにゆし
されしとくおすしをやとなけき給ふといろ
いろになくさめ年きしさらをせめて七条茱萸
とみもやと立へしをれくくうこひくうきに
輿(ゴシ)ゆかすへたきともなかの鎌(ナゴ)沒も見えまり
をさうを舟(フキシカ)憑へとそうつう河をはかりまに山
波さしてゆくかとりて又条うすへのほとに
きしたかく春岡かけなりあまてこしをたて
さ柴石にそ塔(ヌウ)をくそ入るこうはしめ世人の君

たちのためと思うしてふせうろたりとり
りしをいきさらぬてひまをてるしほうさう
のう分給ひし所へゆきたきともこ急すら事を
なく目りしゆう物もなし[illegible]舟(ヤシカ)憑へ抱き
さらをともおすし事にそこうあらんわらを
としころ観音(クワンシン)をこのこと事せて毎日暮(フモンホ)に和(ハ)
三壱(ゲン)泉(ミヅ)後の花秀(ミヤウゴウ)一万返となんかしう半ふこの
まふてまいまる程(ソハ)らは屋かたりう色をたらを
おさなき者やうもれもてあうひ物をみんにつ苗
てもあしまてをとうしうりしなとおも
なんにんみてはくつと先をまろろましけれし

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224

ガラス使用

みそつかをまゐらせまゐらせ
り色望ありける二十二日左大臣はしきんさら四
人嫡子右大臣兼長以前中納言師長同年にて
ともに十九歳なり三男右中將隆長十六歳四
男範長禅師十五にそなりのふとのくあらろ
とひとつにして祖父留義ねにやしされける
そおとゞもれそせをなふれたのこそてうく
て侍らん今度乃死いさゝかもまゝ免ら家色う
らはと取れことにおとゞもかりまゐませ
そこそ子やもハみな死死ふこうとこなられしん
をらめいれちのあらん事をいつ何かきり世

志ゝ孫とも者のいやさをなく出家をとけ申し
嘉の命きえやらはを一かうにまことのみらに
いつまて先考乃浮雲槿をもやふらひ来らん此日
勅使おとゞの法ろのふむりて死殺ありおこ
して路頭にすてをくせ云こあらろうしせ
やしたるまし匠父これかとの国をみ給ふに
うれすをのこせして人にて二度おもて何めを
すへしとも相見をと宣へ入道ねを有を
の事をもしらはとをいさまそをめくて
おもすれそうれをこのみくこう侍るにみな
みれさやうになり侍らく何ふ心をなくさめん

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224　　ガラス使用

左右に従ふなり发人（ハンニンヤウ）萬長等後にこそうひし
小是ものや志きなりけとこ就ハうつらうとよろ
ふこゝろつゝこのなれを目もくれむをまよひて
なかりれしむもことゆゑなりよもそのく
とのきゆきを馬（トハ）頭殿（トノ）にさゝ奥ゆふたて志き
なりをめされて四中殿へ来りて右院（コヰン）の法基（ハカ）
右をおりていさをうきつゝ乃ゆゑ西をもとゝん
と思ふそいりてとおほせくこれ有れし重行
成畏（ナリカレコマ）てやをき渉るまそ以へとも蓋（セシ）の刻（コリケ）侶り
法りに分を後勘（コウカン）ゆゑおりまゆしれを海て
とりゆゑ（ナンヂ）ゆゑいくこそかしも事しをるゝなりさうを

安楽書院（アンラウジユヰン）乃ゆくへ法く就下就むあてりけるゞ
を通しとおほせけきをを明るゝ朱（ウシ）とを法志
けし乃ゆくへをしむけをれそこく法なるゝ小
むをそせ給ふよそほひのこそうゆゑけるこれを
就かけひこれ小せをみ小鐘（ヨロヰ）の袖をうぬらし
けるしはらくあて雪（トハ）の南乃門へやすいくを
國司（コシ）書（スヱ）翔（ヨリノ）居（ヲ）法ふねなるひうゆし（武士）あこ人就
まふけて京（ケウ）洋まそ法毎ゆのをを家重（シケリ）成もさぬ
きうて法とも仕るゝるゝしをかゝ見ぬし
かそうゆゑ西わそなんちの此法となさけあり
法るゝ馬（スヰハ）海りるもとくまれをそふよりいよく

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224

ガラス使用

まさしく合戦今日白河殿の営に其中より両
人出しけり女房たちをはしめ北のかたまて
なしめされねともさいはひて勢をも存しけるとも
これなんらんとそ称しめす昇相てきけるを
昌邑王賀は国より追玄宗皇帝は蜀山にうつ
され我国にもむかしも安康天皇を継体天皇され
崇峻天皇を逆臣ありとのさきをひき十善の君
万乗のあるし先世の宿業とそのつとめ給ふす
世おさめしめしなくさむはしとそなりけりさか
さぬきに流させ給ひしかとも國司いまた流れ
と申くされまさし當國へ在廳数位高岳

せめて君の御なくさみには一宇の堂を松山といふ所に
かたにかへ入奉らせけりされとも事にふれて
こゝやうをたまひし御心のしたにあはれなる事なん
ありまちとらへておほしめすやうにかよりも力を
まつかへりぬ法のまへそなく新院仁和寺へとかくし
させ給ふ法かへとふかきの事なり清盛
義朝清中そしてかせんを申しをして源平両家
のみたかひてあつかりけるとさして東西南北へ
おせらるゝとそ唐八合戦おりたひぬ不思議の落
居して誰人のこの思ひをすてつくし
ぞりるこのとしもひとり亀を重けまさるの物

めつらしてはおとうせ天麿のみかせにゆきり
なくれしかは後悔ありてうゑ里にうせ給へん
よしあらへはいれ里ともありけり伊勢へ公ハ
勅使なとたてられけり白河院も世れあらはさ
しましくて法出家をありしかとも法心付
ぞ給ひ世給ひす清見原天皇のせんしやうなと
をおほしめしけるまや白河院てうそれはん
さしかりかはけるゆゑ院中乃御政務を一向
あの御代よりはしま禮わ後三條はとさまそれ
讓國ののらぬんちうまてまさしを渉せいむを
なりまえなりされをぬんちうのみなりまためし

は白川馬相をかしなり脱屣とすてにかうへを
ふはきやらくつのわしよりくつそすて海にし
きをあること里ありしかはしめすへきに弘句
新帝にゆつりのふてのちまた重祚の法のそこ
ありうれかれをはをぬんちうまて御政務ある
なりすべて道理をうむき王者の法ともさう
ゐりかやうに物數をさるまとかろみたまを出
くるなりすへて今度のうせんを代末史と申
まや直上ゝ皇法連枝なり園白左府も法兄
弟武士の大將嗣義朝父子なり此兵部のみな
りてきさく古院者の御すくめによりて不義の

法更稱ともあるしゆゑより先脱屣の後なれば
すゑまでは其のらひあら無しを尚今をたまきに
ゆゑりましまさしん帝王と申しは清考しも白
虎通にはかなふ人をも帝とせうし仁義にか
なふ人をも王といふ也 正法念經にはし先胎
中より至らるゝ所より諸天これを守護を北
三元のとくをわかりてあるゝ也 給ふゆゑより
天子と獲すせい也 りれ 種にはそ三十七法 是
せろを國王といはくつ ○ は恵施 ことなひ
てはしかす柔和にしていかられ正恵にあと
りてつん 偏 そなく 頗 如れさみらをたくしまして

すてもよく人の好惡なしに 縛世の理らんと
りく見貪欲なく邪見なく一切をあはひ十善乃
行をは説ありされはいかゝりも得ることし明
日天下をおさめ給へきに 堯子 なりおれは度
をたて后妃 よまよひておとうとをりらゆる國
乃みるおくりてひなりあしをりて書はいはく
聖人乃礼をなすうれ 嫡 とふとみく世を清り
志しかなり太子 徒 しまして 庶子 をたふとん
そ 龍 はしめなりかれ 危 匡 なりいるると
まる 偽 にいはく 后 なりしんで 嫡 誠 智 するそ國
れ 乱 おくもせひとこゝされ 吾 おれうして同

年の太子あまたおりしまさしを下りれられ
みたまかはや詩をそ艶女をそしまさ詩
婦をいさめたる王者の吾をたのふ色ゆ色あるか
つかなり吾也也位を交圍りたくし見
して躰を君王にひとしまされそ三婦人九嬪
廿七世姫を十一女にてうち老成たをけなか
よて詩りいそ見圍ことる雎嶋君子の淑をた
まくとこゝやはるかなる雎嶋の河の洲にあて
たれしかれてい幽深としてそ罵あるかことし
こうひとのく圍雎の淑ありて幽深貞高なる
君子のまかたくひなりあくをもて天下を化し

支姫をまうち父子をしたしん夫婦より礼
ありて鶴庭たくしせいる事新の國に姫人き
雙堀とかはくかたらみかくらしていろくろし
喉結おれ項肥たる腰そおきたるかことを胸を
はきいくせかかあくしほうら無乃後ハ世流
の毒りすくれ盤縷のうへ乃まぬ董城の米に
こそたりお類せそれひせりす匡くまうぶら
たりに頷顊とをとうひほそに隅目とすすがそ
たらそされそ三十りなりまそあ色てのどる老
なし或阿益帝の文へまふてくゆさを妾夫
並の聖淑ます事をきくり后妃の数に語る

なからん事をなけかれて論来撲ハ遠回をおもふ
讒奏は酒肴をもて是をすゝむるさまにたな
のみ又人口をおほひ目ひをわらふ宜様よし
をとなへしめたまふ人雖然とかくりて心を
うてかやうの事くもりふるましき道帝何る
との人へ事につねにもくれを由色とまうんと
妬者ていもしく大王の天下をおさむる事まに
讒奏かり南ちに讒者の手をかねかの
ひとを三国の難敵王国にて姦臣のまさに運るに
のし春秋四十七にして此まて太子立給はず
さく継嗣を思きて他人とのこうつしあのし亦

ゆほしひまくましてこの心つくすところをゆる
くまりもし一たんは事出来らし社稷しめ
まらし是一五重の讒奏をはゝかりて金をもこ玉
をおりとめて国中の万のことし万民
あとくを後のまさり是二賢者を山林にかく
し佞臣をたえうかるかる迄乃至するものこ
すこみやくいさめをとするもの是三さけを
さしとめにおほれつとるをもひとゝめし
あゝかし計らんとして然るを国家の
おさまるを思ひすたりへする読猿孔政治めを
是四巻にく世中世も違てまうる故に今寡

人がいふ所見いたまうおとゝたるまうの面ことに
まうめやまつのそれをしきなり方の金りし
ぬらんなりちかきまゐりとてさう取千漸義と
こがちてすて服喩をとゝめ色ひらゐる臣を退
け賢老をまゐき女楽ぞさけ洗酔を禁しけぬ
に太子ぞえらひ山荒堀君を尊して吾とさる先
しうを斉國大きに至をしこれ醍女の功なる
といふ色りしり法をいさそうく龍色りしけ
彦電をされとして後宮大きゆゑに國みるなく
なりされを周幽王を麋姫をめひしてもとの吾
しんこうなるひりうれはしの太子ぞすて麋

姫を吾として遠服の伯服ぞもて太子とせしか
をしんこうつりをなして繒保を西夷犬戎に
めるゐて幽王ぞこやこをせめしかを燦火を
めくれとも兵も集さすして幽王うるきなひて
周國がろひくくわすへて天下のみこれ故色の
たかふ事后宮よりいつ祝なりよりを汚小云ッ
婦人長吉めるこまきさらひのはしめなりたん
よりくるをりあらす姫人よりなりせい色り
長吉とそいふ事おほしてまさるひをかを
なりさまさ升て老ぞをしゐて悪を明さしむる
まもあらす乱のみうを明くなるまもあらされ其

婦人をもつて政道を調(コトハ)と周書にもいはれ禍乱(クワラン)お
こるなれは、されは婦人を政(マツリコト)にまじゆる事なし
政(マツリコト)にまじへられは禍をまねくといふ事史記(シキ)
にもまをて牝鶏晨するときはその家ほろぶるとかや
唐の高宗の時則天皇后まで
我朝(テウ)にかゝるためしを婦人政(マツリコト)をいろふ事あれ
は国みだるといへり、鳥羽院美福門院(ビフクモンヰン)に語られ
させ給ひけるまゝにて、此事ともおもしあさ
ぬ新院(シンヰン)をしらずして近衛院(コノヱヰン)を御位
につかせ給ひ、嫡流(チヤクリウ)をさしおき第四の宮(ミヤ)今上
天性わかゆゑよしをられ出来せ嫡々(チヤク)をさし

ときおりしもかたきを故院(コヰン)の御あやまりすや猶れ
ともに天津日嗣(ヒ)をうけまくも叶はしかなく
天照太神もはしめてつきに御ゆつりある御事
なれとも、おもひしりあるめ御のそみありし君ひと
王も御本意(ホンイ)とをけられさる事すくなれは
御ものらひおかのゆゑをまもられしより世みたれ
はしめて御謀叛(ムホン)ならでまうけておもへ謀義(テウギ)いよ
いよをさまらず洛中(ラクチウ)の兵乱(ヒヤウラン)をこしとはしめ
とかくなりけれは、かの人々配流のよし宣下(センゲ)せらる
左京大夫入道は常陸国(ヒタチノクニ)、近江(アフミノ)中将成雅(ナリマサ)は越後国(エチゴノクニ)
盛憲(モリノリ)入道を佐渡国(サドノクニ)、正弘(マサヒロ)入道を陸奥国(ムツノクニ)とぞきこえし

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224

ガラス使用

なり挨拶遠使惟繁賢結二人追立の清りひ兄才
四人をハ〳〵至誠いたやうくまたしたるをも
下ヲ来てけまじとしらるゝ事なしも
うたてけなかりしかはり給ひける人目をめて
られさりけり
大政官府
庶追位祀事　左京職
正二位右京朝臣兼長　出雲國
從二位右京朝臣師長　土佐國
正三位右京朝臣教長　為濃國
右正二位行權中納言兼左兵衛督藤原朝臣忠雅

宣奉　勅件等人座事配流件國々宜行所職令
追位記者職宜承知仍　宣行之府所奉行
保元二年八月三日
修理左京城使正五位下行右大史兼皇帝博士
左弁官下正五位下右京朝臣
大政官府
庶　還俗大法師範長事
右正三位行權中納言右兵衛督藤原朝臣忠雅宣
奉　勅　範長座事　流安藝國宜作所省先
還俗首　承知依　宣行之府主宣行
保元二年八月三日

左文藻使正又位下行左大史兼筆博士

兎弁反正又位下菅原朝臣

山範長稱師を配所あまの國とそなしし名なんと
とじ名ふとうなかまとたらまりまた東西南北へさ
せんりとてむさはふあらうのうちうあれ
遷なれ師長を大物といふ事ナと思り給ふ事
源怪奇也いふそれ所の御とし隠匿をなしひたて
まつりてつゆり乗りけるり寇盜の得をくる
そてされまて乗てよもそうる秘曲ぞ思ふ也い
所くのうらまそしも乗ろ急くゆへとも武士ゆる
し侍ら詠まりまり也ほ活名ぞ相し也ほと

中をしなんぢかさけありてこまきまて来れ事し
ようありしとそれとて意海ぞれひきよくとさ
清き給く是譜のおくにうそあうそされける
をしへをくうれ事のをとわするおよみを
あをうこの明みとしつむと怪奇袖とひろけて
これを給里清くなるこうむせひくたちより
今日山外くかくへなりさおく人十四人とそ
ゆるし志禅閤を左府の御にみのきんさらかも
みかくまりれのへを防椽を御急しくしてか
りるこのおりひりきそやらぬ寇のいれちも
かくうらめし也いきてこのを思えんよりなく

春日大明神いのら給ひ後と申さ後のふつせめ
て乃御事とあれなり八月八日宇治大お國
冨家ゆりう色ゆきまさせ給へ申さよし内ら申
さ後給へ宮も天氣ゆゑすあ下御御面前にて
悪業をもよほし給けるとて配所へ御うへ
へきよし宣下をうれけるを信西園白殿へ此由
申しせて殿下文を配所へ御うりしてそれ子持
禄を仕らんるす面目なきよし給ひて信西は
由給そうさんを園白させうすゆしさ
なりうこうあらめと御用せなりけるを禅閤此
よしをきあしめして園白入道のまを是ほとに

ゆりひけるものをなふのゆゑ色ゆり旦来こころ
よりうを思ひつら無とて御後悔あり志ゆ
れやうもなと世給おうきさ後のひて内裏へ申さ
せ給けるをもし湖家の御座の聖人と存せを
天神地祇の冥尋をうう少り尚来まを三世れ読
佛の利益りも御面しとそうく世給ひける
南部よ御座ありてハあしうるなんとて園白殿
よりの御むうへ小人を急らせられけれし御所労
とて出ふきつすな給世をあやぶませのふゆゑ色
なりよて殿下よりを清子左衛門督基実と御ほう
ひとしてこれしを申させのひけれをもとき

へ給はなんと申いてゝ内てゝ
はとし八十四とそ申しし 新院八月十日より
法下(ノリ)給ひし國ゝを法さけふ
松山(まつ)より出座(ゐ)りける方國司すてゝ出湯(いでゆ)と云
所を御所をしつらいてさしられ給へりし
らせおはしまひ世を御らんぜしかとも口一ぱい
めきて日より三度の御湯(ゴ)あらせらるゝ事
とひなみ人もなしはしてたゝかなりぬひた(鄙)
の法すまひそりけしまさに秋もやうゝ山け
雁くまうれ松をとらふあらしおとゝ東ひしかは
よりるむしの乃こゑもしかうく秋乃なるのつる

うふ海をもくかもおなしふことつて世御しを
暁(アカツキ)のちとりのもさられにさもくも語んけくこく
たねとなるまゝ方乃御るけきまるをわ御るふ
つゝをもり給(なし)る女房(ニヨウバウ)たちのみし志川を語ふは
いよゝ法のうるまゝりまれるりふ志ん
なふをうきて天子乃位をよみ太上(ダジヤウ)天皇(テンワウ)の尊号(ソンガウ)
被蒙(カムリ)給て松楡(まつにれ)のきよをしめき先院(センヰン)法(ザフ)世(セ)の
めひこなりしを義椹(ハシキ)のまつりあとをあらら
ままう殿まとり色とも日ひさし見仙洞(セントウ)おはし
ひゝしかありしを出なきことあるす或食(ヲシ)苦(コク)
されをもてあうひ或南(ナンウン)播の月は候(ギ)しをてを

三十八年成をく積わきまし所にとしたる
此日のゆめにことしいりなりお世の者葉り
かるなけきましつむらんたらひからもの日
うえ白ろくなりとも西京に都としたるをさしめて
巨山の鬼とそなりしんすしんひとへに後世に
にためとて五月の大家鍾を三年に作り御
自筆にそあるはしてうひかねのとやもすしぬ
取手をさ来らんを東使なりは幡山の高野山の
もしにゆるしあるを高野に安楽寺院の法墓
まをきをわたきよし平治元年のころ仁和寺の
法宣へ申しさ奥のひしりを又宗よりも関白殿

へ此よしつたる色申しさ奥のふ殿下よりもうへ横
にとりと申させのへやも皇上御ゆるされ
もなくしてかれに鍾とそおもうり色しほり
をされ御むろより御とうの先おもくおりしますす
ゆ色御鉢なりをうやこちのくへとうまうて
きりしあひさちから及ばすと御色事を
あれて法皇のよしきあしめして口おしき
事まりのまうきからに至尊且中も幽とろん
ししくるをあらそひく伯父甥むかんを拘志
太兄弟合戦いたるなるかりあらすわまは
事を見井思ひ悪び懺悔にために此鍾をうか

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224

ガラス使用

まつりなる事中にこなひしつけるを一所なり
去ぬる保元三年八月廿三日に此くに井春実に
ゆつりのふ二條院をなり院とゆしを光帝後白
河に此事なりけるよりもたちまちなりかの
ひぬ義朝も平氏にうちまゐておちゆきけるか
尾張國にてお得の家人吉田庄司忠家なりうて
れて子ゆきもみかたさい流刑なりかこなを此國
ことなりし若宣ひけるあとくなりせんたんを
二をまつうをしたかやうひんをかひこの
中にたへなるこゝ思あかことをしまつ所さ
かれとも此家に生きて其乃みうをしり

けるまつうあられるれ山龍をさぬきれぬん
いまに此世のあひたにまのめたる浮をんねむ
のいたす所と人中をり仁安三年の冬乃此
西行法師読國修行の所ゐてに白峯乃浮基なり
ありて所くしくと見ゑらせむりし此所ゐ思ひ
出来て此くよそ待ける
よしやたむしの玉結ゆうとてもかくらん
のらさなくうもせん治承元年六月廿九日遊
号をて崇徳院とそまけるかやうにあるめ来る
せられたれともなれ此いきとれをさり
けるにや同三年十一月十四日より清盛朝家を

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

は泉遊江岡（アラシリニ）福田と云せよろはかくれいて泉水
一人法師ありなして乞食（コツシキ）に数て日銭をくる
をりつきしへくるゝ家へ来かたれしけるの平家
のさふらひ競（チソゴノ）坂守（ヤミイヱサヌ）家貞大勢にて此家を取れし
うれほとひ家をかりきしいまて方をかく
志よりそ此をは出て志よく（食）ら（事）をいはなるゝ
かうろ（有漏）の方なれを屋をゆさして矢治（キウジ）なて相得
見してうん（瘟）しつ（疾）大切（ヒツ）の者ゆるきゆ屋とよりて
鬱（ツ）はおりゆをそ志を御家は佐渡（サドノ）兵衛志を
といふこの蓋（ヒジ）をかうしかりて國中をとらは
りて先ならず不ありあるをれ申しけるはあの種

あのゆ屋ありぬ程老ようあやしき人なれ大
おとこの相うろしあなるさをうふ鬱（シンシヤウ）は
なりとしをサはりをなるがひ（額）に井ふきをあり
ゆくしを人は志のぶとおほえたるとかくまを
九月二日ゆやりおりさるとき三十ちまて
をしよきてをりぬ（タメトモ）相まはるかて合（ガウ）来（キ）はもて
あるさのものをそうら此せたまはるも大勢より
とりあめられて云うひなくかうめられはなり
孝（スエサネ）実料ありけとりて二條とりしへ且ことをしろ
きすひうんをかまりあるかかくひらをきせ
りとせをはしろくしをそさしさりける小阿（キタヒ）

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

すりら縄(ナワ)もひかすかりして道場(ギョテウ)をとる
そとせへをまれらうくまかりまや道を自然(ヒン)と
うちよせらるくをひろむと成馬をも穴(アナ)をかり
て鉦(リャウチ)知(ヲ)わかてそのあなふりを者をうしこ
をまねびくよ色をうれしこれ所ねてこれ相
くとひいろあなの口をぬされてやこどりう
まるなりとうふ業にもみわしこのあれ相
しうれと星のせいをひえどを程なりぬ鶏を
をゆ結ひて伴(ワダン)の大りふうまて木りあるを村(サ)
却とし思(ソウ)をかけれをいこうしなとしぬへを
鴻のをの世吾(シヌ)拵(フツ)て知らおうふなんちらも我

まさうりすそうくれあと星いこうも面し
とれるまへをみか卒伏(ヘイフク)してしるうひかり者に
きるこのをあこのあとをなら太布(フトヌノ)まりしぬの
をめんしくの義こよわ相くりら出てまへま
ほこをうりし海れ少紙とうひ給へを鬼りし海
とや紙をなんちらを鬼の子(シ)鎧(ヨリ)さんいさて
を矛こゆるたりしあらをとまいるさよみんと
宣へをひりしまさしまきちん(鬼神)なりしとき
をかくれ見れ叩くきりさううびぐつ紙(ケン)なと云
たうちありかりうれこゝろを弄なれとも他國(ヌコウ)
へもわるまて旧(ニウ)食(ショリ)人れいけれ志をもたりかり

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224
ガラス使用

嘉応二年四月下旬に大しまのかたへよせ
らるゝ由きこえしかは為朝もよろこひてこれをかく
小舟のともの見えきたるをなかめみつゝまいまし
とめさまふめき人々ねやらん院宣をうけまはると
かしこくもさしむけられける討手のむかふ
やらせしと道つしのんれことく兵船なりさきてを
ゆさめて大勢なからんなとひ一義(?)諸なりや
うら破て出らんと思ふもく一海にこしきらんこう
もうひたてまつるも科をらふ色(?)されやも御ほく軍
兵とうむし人民汝なやまさんも不便なり勅
命をうけさて行ぬるや何のせんつあるへき

鎮西の在島にて高倉院の御宇嘉応二年の春
の後京にまゐりてそのよしをそうもんし茂
光か所領の地をことごとく押領しあまつさへ伊豆
の島々へわたりて五島をきちんと領しつくりて
かしこの人民をしたかへとりあつかひたへ
かしこ当国にも院宣をかうふりきたりめしとて
当国住人茂光に押領の勢をもよほし発向すへ
きよし院宣をかうふれりと申しあはせ
ところへつもりしかはそのまゝしくて伊東北條宇佐美平太
同平次加藤太加藤次沢六郎新田四郎藤内
遠景を始めとして五百余騎兵船(ヒヤウセン)廿余艘にて

ぬる保元に勅勘をうゝかりて流罪の者せなり
しかともあの十餘年は齒不のぬしとなてん
はかりきたれしめまうれいぜんも九國を發給
しき思出なきかりめしまつくしまでき菊地
原田をはしめとして西国の老ともそみなわりの
手かゝの乃ほとをしまぬ無こうやこまでは源平
の軍兵ともすしむさしさうこの所にともまる
弓勢をそしきりぬらん物をまゝ外の者せうつちう
とよろひきうぜんをたいしさるはかりまで
ようあらんをれぬ物ありしかてゆゑむかん者
をおほえぬ物をいさゝやこよりの大将なりを

ゆゑを平氏なりとうゝ下にらめ一こいころして
流ましめんとおりへともはぬまうれそぬ君は
むやくの飛行くてなかりぜんをまでいれちを
おしむも法世もおそなれらもちくのいしゆ
をもとけまりな皇をもたつせをやとおもへし
ようあれしうれかみ流罪さくしか欲急過去
因見を現在果欲急未来果見を現在因といふり
されしはをはくらをうれ惡逆ありおほ
へしたりまとゝ武士とる老殺業なくてそうな
いすうれまをてき武のみり姓名のこのをよる
さす為物ゆせんする事二十年度人のいれち

とあれたる色つといと成せるもあ本の[ヤメ]目[ヤメ]ある
りまて姫孫そうこ色そよひ入けるあらろき
つるこのそたて[楯]うひたて[楯]りてくるふ
所とろ[楯]り[楯]井ゆこ乃いすふとるほきてならひの
姫ねへ家うのつてそれすりるけるる[スメトモ]朝これ[朝]
見のひて保元乃ひすしへしや一しまして二人
乃[ムシヤ]武者を[井]射こ[ハ]しき[カシウ]未[ヤ]恵のいさそ一やまれ
見乃長をころし[ソハ]早[ソハ]夏[ソハ]にて[ソハ]孫後佛とそやされ
けるいさそおもふ事なしとて内りいる家
乃ほしらふうしろとあてくはらかき切てそ
[イ]居たるこれ乃ちそ姫ねともつるかふこき

もせしてやけるそハ[ユンヒイ]所殺乃弓勢そいさまはし
めぬ事なれやもいりくハすへきまれらうよろ
ひとぬきて所すやきするなといふくくのしるこ
くまてほと姫れともさしいつ[ハ]てきもなけ
まこまこおつく姫ねとこきよせられをあ色
てをしりひすら者をなし見りほきてもた
ちかて[ソガ]濃小めきて[ソガ]をうたんすらんせんり
[ソニ]鬼[ソニ]祖法をてあうなくちかほうをされやも殺の
う色よ目をそくなへきかとそ切りひ[キツ]切てるの
わしたつほとまもなつしうしひさともみな[ソイ]遊
おろしてひさくとうちはりておもひかけ入

とゝたてゝ人者のやうに見えなくなれとゝ
をもつやうにおほえうんせい事にて敵の
うちいるらんをさしのうくてゐ所そありける
されをうしてまれまされの事てうちとらん思
中せし兵ともこれをみくおゝ入との一人もなし
まゝ見安軍のおくひ屋うなる中もあらすこゝ
日ころ人ことにおちなしむこゝろつゝれなり
かゝうまゝいふんの勇士をもわろびはてすゝ
みそすたく外郷をとり海をせ給けりなる家
まか夜の景屋に寄したりとみおほせてやあり
まん長刀をもてしろよりねらひよりて法

法曹司のくひをそおおとしけるよりて是日の
高谷の一の手にそ法ゐるゝけり首をそ同五月
ふゝやこへのかせけるを院を二條京極にて法
車をたてく穀笠あり京中の貴賤を俗くらん
三西を此為鈞を十三にて法くしへくゝ里九
國紙三年にうちしたゝ迄て六年おさめて十
八歳にそゝやこへのあり保元の合戦にて名を
あらはしけ九歳にて鬼の鳩へ且ゝ鬼神を
屋つことし一國のそれ知らおうなとゝ勅
勅の方をれを法ゐ事なり本皇紙とけを此にして
名を一をまひろめけるといふしへよりいされ

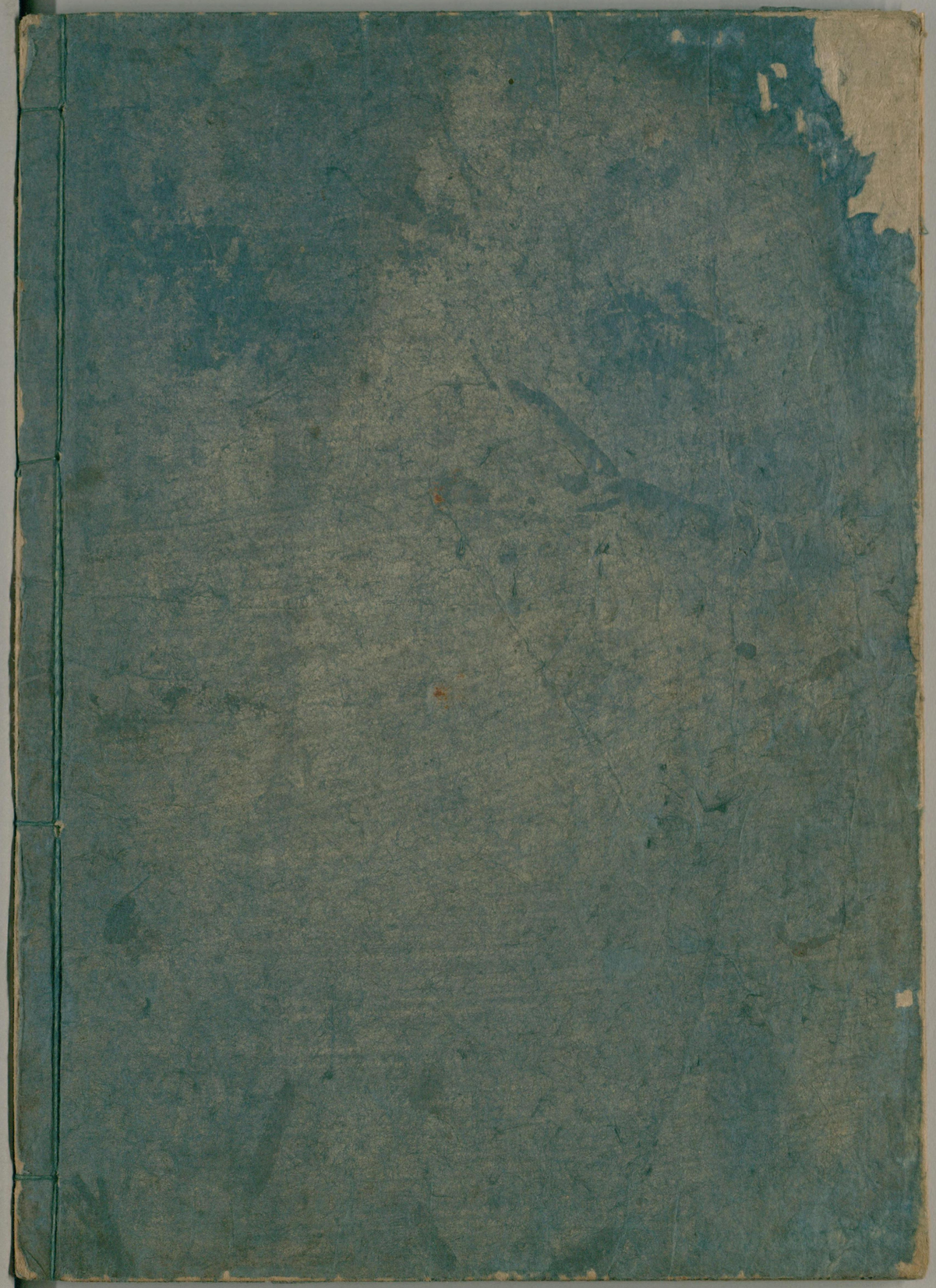
いとこ所まで山ゐ物かとゝ乃々けきれ勇者なり
とそ人申ける

保元物語巻下終

国立国会図書館

国立国会図書館　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『保元物語』　請求記号 WA7-224

ガラス使用